

サッカー 勝利のための戦術とチーム編成

—東京経済大学サッカー 2015年～2017年の実践—

富岡 義志雄

【はじめに】

現代サッカーのトレンドとなっているシステムは、「①4-3-3システム、②3-4-3システム、そして③4-2-3-1システム」である。

2014年FIFAブラジルワールドカップは、ドイツの優勝で終わった。

ドイツが採用していたシステムは、4-2-3-1で最終（ディフェンス）ラインから前線（フォワード）までバランスよく選手が配置されている。

ドイツ代表の他にも、クロアチア代表などの参加国や、クラブレベルでもマンチェスターユナイテッド（プレミアリーグ：イングランド）、ユベントス（セリエA：イタリア）、モナコ（リーグ・アン：フランス）が、このシステムを採用しており、このシステムが現代サッカーの主流と言える。

攻撃時には、トップ下（2列目の中央⑩）の選手が攻撃の中心を担い、トップのストライカー（⑨）とのコンビネーションから幅広い攻撃を組み立てる。

また、高い位置をとるサイドバックとウイングとのコンビネーションからサイド攻撃をしかけることができる。

トップ下の選手にFWタイプの選手を起用し、タテ関係の2トップを形成することもできる。

高い位置にディフェンス・ラインを敷くことにより、守備に回ってもコンパクトな陣形なので守備ブロックをつくり易く、相手の攻撃に対しスペースを与えず複数の選手でボール奪取が可能になる。

システムは、単なる選手の配置ではなく、チーム作りを構築する上で重要なファクターとなるが、選手の個性（特徴：プレー面・性格 等）を抜きには考えられないのも事実である。

サッカー 勝利のための戦術とチーム編成

個々の選手の力をチームとして機能させるために必要であり、配置された各選手がチーム戦術によって与えられた「役割」を守りながら、それぞれの「持ち味」を発揮するためのものである。選手には、個性（性格や技術力・身体能力等の特徴）があり、その能力を最も発揮できるポジションが必ずあると考える。

システムを決定する要因は、大きく分けて以下の4点が考えられる。

- ①監督の好み：その監督のチームの作り方なので、「良し悪し」の問題ではない。
 - 例) ジーコジャパン=ブラジル出身で、単純に「4バック好き」が背景にある
- ②選手の質：チーム内の現有戦力から「判断」し、決定するケース
 - ⇒ そのシステムに見合う選手を抱えていなければならない
- ③スタイル：監督の好みが影響を与えるが、「どんなスタイルを志向しているか」によって決まる
 - ⇒ スタイル = i) マンツーマン・ベースのスタイル か、
ii) ゾーン・ベースのスタイル
- ④継続性：極端にシステムを変更すると選手は混乱してしまう
指導者は、i) トレーニングをとおして観察することによって選手の個性を見極め、ii) 適材適所に配置すること、そして、iii) 明確な戦術的意図を選手に伝え、試合に勝つチームを構築することが重要となる。

1. モダンシステム：4-2-3-1が多くのチームに採用される理由は、

1) 攻守のバランスが良く、多くのチームが採用する。

i) システム特性 = 攻撃的サッカーを代表する布陣

- ①攻撃度 = 5段階の4
- ②安定度 = 5段階の5
- ③応用度 = 5段階の5
- ④使いやすさ = 5段階の4.5
- ⑤浸透度 = 5段階の5

ii) 攻撃のワイド化とタスクの複合化ができる

⇒ 実際に効果的なチームプレーができるかどうかは、全ての選手の能力がポイントになる。

2) 基本的ポジションは、下図の通り

	<p>⑨ : 1 トップ = ストライカー</p> <p>⑩ : トップ下 = セカンド・ストライカー</p> <p>⑪・⑦ : ウイング</p> <p>⑧・⑥ : ボランチ</p> <p>⑤・② : サイドバック</p> <p>④・③ : センターバック</p> <p>① : ゴールキーパー</p>
--	---

3) 各ポジションの役割

* 選手のポジション適正を見極めるポイント (必要な能力: 技術や身体能力 等)

① 1 トップ (⑨)

- イ) 相手ゴール前でフィニッシャーとなる (ワンタッチ・シュート, ヘディングシュート 等)
- ロ) ポストプレーで攻撃の起点をつくる (相手 CB に体を預けてボールを収め攻撃の起点となる)
- ハ) 相手 DF の背後へ飛び出しチャンスメイク・カウンターに係る
- ニ) フィジカルが強く, ボールをしっかりさばける能力
- ホ) 相手にボールを奪われたら, ファースト・ディフェンダーとなる
- ヘ) 理想は, 体も大きく強い選手

② トップ下 (⑩)

- イ) ゲームメイク = 1 トップをフォローアップし, 攻撃を組み立てる (イマジネーション)
- ロ) ゲームの流れを見てドリブル突破や周りとのコンビネーションで崩す
- ハ) 変幻自在のパスで攻撃陣を生かす
- ニ) アシストのみならず, 2 列目から飛び出しゴールを狙う
- ホ) 守備時には, 相手ボランチをマーク

③ ウイング (⑦・⑪) = サイドミッドフィールダー (攻撃の幅をつくり, サイド攻撃の主軸)

- ⇒ 以前は, 右サイドは右足利き, 左は左利きを配置したが現在は逆の利き足選手を配置することもある
- イ) 一人で突破できるドリブラー (サイドを切り裂く)

サッカー 勝利のための戦術とチーム編成

- ロ) 正確なクロスでアシスト
- ハ) 中に切り込んでフィニッシャーとなる
 - : ゴールに直結する役割 (特に、逆の利き足選手に期待される)
- ニ) 守備時には、高い位置から相手 SB にプレッシャーをかける
- ホ) 内に絞って、ゲームメイク (⑨・⑩同サイドのボランチとのコンビネーション)
- へ) 同サイドの SB とのコンビネーション (攻守とも)
- ④ボランチ (セントラルミッドフィールダー: ⑥・⑧)
 - = 攻守にわたって、ディフェンダーとフォワードを繋ぐ役
- イ) チームの戦術面で重要な役割を担う (広い視野でピッチ全体を見渡し、的確な指示を出す)
- ロ) 守備組織の構築とボール奪取能力の高さが要求される
- ハ) 相手 FW へのタテパス (クサビのパス) を防ぐ
 - = 運動量と球際の強さで相手攻撃の芽をつぶす (ハードワーカータイプ)
- ニ) ビルドアップの経由点となる
 - = 長短のパスを繰り返す、攻撃を組み立てる (ゲームメーカータイプ)
- ホ) 攻撃的なタイプと守備的なタイプを組み合わせることが多い
- ⑤サイドバック (②・⑤) = サイド攻撃の要となった
- イ) 攻撃面での重要度が増しているが、基本は 1 対 1 に負けない守備力がなければならない
- ロ) 選手の特徴によって、3つのタイプがある
 - i) センターバックタイプ
 - ⇒ 身体のサイズがあり、逆サイドから攻められた時、中に絞ってゴール前で守備力を発揮する
 - ii) ウイングタイプ
 - ⇒ 攻撃色が強い
 - = ドリブルやスピードを武器に相手 DF を突破し、チャンスメイクする瞬発型
 - ⇒ スピードでは劣るが、豊富な運動量で上下動し、攻撃に参加
 - = 守備面でのポカが少ない
 - iii) ボランチタイプ
 - ⇒ 戦術眼に優れ、サイドバックの位置から攻撃を組み立てる
 - = 守備的な色が強い
- ハ) 同サイドのウイングとのコンビネーションが欠かせない (攻守とも)
- ⑥センターバック (③・④)
 - ⇒ 依然として守備の能力が要求されるが、攻撃センス・パスセンスが求められる

- イ) 圧倒的なフィジカル能力
- ロ) ボール奪取力
- ハ) カバーリング能力とビルドアップ能力
- ⑦ゴールキーパー (①) = 現代サッカーでは、GKに求められる能力はとても多い
 - イ) 正確なキャッチングとポジショニング = ゴールを守るための技術
 - ロ) 瞬発力と俊敏性
 - ハ) 攻撃のビルドアップに参加するための足元の技術 (起点となるので正確なキック・パス能力が必要)
 - ニ) ゴールエリアを出てのプレー技術 (高いディフェンスラインの裏のカバー)

2. 当初の研究目的は、「①サッカーのシステムの変遷と勝者の戦術を探る, ②チーム編成の核となる選手の特徴の把握, ③現代のシステムにおける各ポジションに求められる適性を探る」であった。

本学サッカー部は、2014年度の東京都大学サッカー連盟1部リーグで結果を残せず、2部に降格した。この結果をふまえ、指導者自身が今までの指導方法を見つめなおし、「1年で1部復帰を果たすため」には、勝つためには「どう指導するか」を再考する必要性を感じた。

指導者が明確なチームコンセプトを選手に提示し、それに沿った戦術によってチーム作りを行うことを再認識した。

本研究は、3年後の関東リーグ昇格を目指し、本学サッカーの再構築を図ることを主眼とした実践研究(指導)を行った結果の報告である。

【本学サッカーの目指す方向】

1) 採用するシステム

- ⇒ 本学サッカーの再構築にあたり、システムは4-2-3-1を採用することとした。
- その理由は、主に以下の通りであった。
- イ) 攻守にわたってバランスの取れたシステムであること
 - ロ) 攻撃的な4-3-3や守備的な4-1-4-1と試合中に変更することのできる万能型のシステムであること
 - ハ) 現有選手にこのシステムが要求するポジションの役割を果たす選手がいること
 - ニ) チーム戦術を浸透しやすいシステムであること (各ポジションの役割がはっきりしている)
 - ホ) 4バック、ゾーンスタイルを継続させる (チームコンセプトの継続性: 指導者自身の好み)

2) 機能するための基本的戦術

イ) 攻撃

- ①高い位置でボールを奪い、ショートカウンターを狙う
- ②攻撃の幅を十分に取り、サイドからの攻撃を主とする＝ウイングの突破⇒クロス攻撃
- ③サイドバックの積極的な攻撃参加
⇒ 同サイドウイングとのコンビネーションでサイド攻撃を厚くする
- ④1トップのポストプレーからの中央突破
- ⑤シュート意識の向上＝前が空いていたら躊躇なくシュートする意識付けを図る
- ⑥シンプルプレー（パスによる攻撃のリズム作り）
- ⑦ハイプレス&ショートカウンターと堅守速攻の見極め（判断）

ロ) 守備

- ①コンパクトな守備＝相手に攻撃のスペースを与えない
- ②基本はゾーンディフェンス＝チャレンジ&カバーの徹底
- ③ボランチがチームバランスを修正し、守備組織を整える
- ④ラインコントロールを常に行う
- ⑤高い位置からのプレッシング
- ⑥プレッシングとリトリートの見極め（判断）

3) 実戦で生かすための基本的練習 例)

- ①選手主体の「考えるサッカー」を目指した。選手が迷った時、理解できなかった時のみ、アドバイスをすることとした。⇒課題は、指導者が提示するが、どのように実践するかは、選手に主体性を持たせた
- ②ゴール前での「攻撃2対守備2+GKの攻防」
：ペナルティーエリアのスペースで実施（1セット5本で交代）
 - イ) 攻撃＝オンザボールとオフザボールの個人戦術の理解
(DFを外してシュートかパスかの判断)
 - ロ) 守備＝チャレンジ&カバーの理解
(カバー選手が指示を出し、攻撃的な守備を行う)
- ③ゴール前での「4対4+GK」ペナルティーエリア×2倍のグリッドで行った
＝攻守の切り替え（1セット6分×8セット）
 - イ) 攻撃＝シンプルな攻撃
 - i) 常にシュートの意識：シュートゲームであることを強調した
 - ii) プレーの優先順位を意識させる

(シュート、できなければ味方にパス⇒素早い判断)

ロ) 守備=的確なポジショニング⇒シュートを打たせない

- i) ボール保持者に対しては、正面に立ちシュートをブロック
- ii) オフザボールの選手への対応⇒攻撃の手数をかけさせる

④ゴール前での「4対4+クロッサー(サイドからセンターリング):両チーム GK)
=攻守の切り替え(1セット6分×8セット)

イ) 攻撃=クロスに対する走り込みのコースを考える

- i) 正確なクロスボール=サイドプレーヤーの資質の向上
- ii) 守備者の前に入り込む(ニアサイドへのラン)
- iii) 守備者の背後に入る(ファーサイドへのラン)
- iv) マイナスボールへの対応
- v) こぼれ球への対応

ロ) 守備=クロスボールへの対応

- i) 先にボールに触れることを第一に考える=先読み
⇒どこにクロスが入るかを見極め
- ii) 競り合いに負けない=相手選手を自由にプレーさせない
- iii) セカンドボールへの対応=攻守の切り替え⇒クリアーだけで終わらせない

⑤ハーフコートでの「攻撃3対守備2+攻撃時のプラス1」⇒プラス1がGK役

イ) カウンター攻撃を意識した攻防

- i) 3がカウンター攻撃
:2が守備(攻撃は、数的優位を生かしフリーでシュートを打てる場面をつくる)
- ii) 攻撃が途絶えたら、2+1(3人)で、攻撃に移る(カットした場合は+1にバックパスから始める)
- iii) 逆サイドから、2人のディフェンダーが出て対処する(プラス1は、GK役)
- iv) 繰り返し(メンバーを変えながら20分実施)

ロ) ポイント

- i) 攻撃=シンプルな攻撃⇒手間をかけず、数的優位を生かした攻撃
- ii) 守備=1stディフェンダーのチャレンジと2ndディフェンダーのカバーポイント考えた守備(どのタイミングでプレッシャーをかけるかの判断=2対2or1対2に追い込む)

⑥ハーフコートでの「8対8(GKつき)のゲーム」

イ) 縦長のハーフコート

- i) 攻撃=縦に速い攻撃を意識させた⇒攻撃の厚み;シンプルなパスワーク
- ii) 守備=相手の攻撃を遅らせる⇒高い位置からのプレッシング;守備の厚み

サッカー 勝利のための戦術とチーム編成

ロ) 横長のハーフコート

i) 攻撃=サイド攻撃を意識させた⇒クロスからの攻撃；サイドチェンジの意識

ii) 守備=サイドへの追い込み⇒サイドチェンジをさせない追い込み

⑦ハーフコートでの「コーナーキックゲーム」(1セット8分×6セット)

イ) Aチームのコーナーキック5本=ボールアウトになるまで攻防=Bチーム5本

ロ) 攻守の決まりごとの実践

ハ) スムースな攻守の切り替え

ニ) セカンドボールの獲得

⑧オールコートの「11対11のゲーム」

イ) 1セット12～15分×3セット

ロ) 毎日、トレーニングの最後に実施：その日のトレーニングにあった課題を提示

*以上のトレーニングを曜日ごとに「主トレーニング」として行うことによって、コーチとともに注視し、選手の特性を把握し、ポジション適正及びチーム編成の核となる選手を選抜した。

身体的コンディションについては、大部分はカテゴリーごとに分け、トレーナーと選手各自に任せていた。(新しくできたトレーニング室を活用し、選手が自主的に行える雰囲気構築した。)1日のトレーニング時間は、90～120分。

居残り特訓は行わず、選手個々人が自己課題に取り組んだ。

【 2015年度(1年目)の挑戦 】

◎村山キャンパスのサッカー場が念願の「人工芝ピッチ」にリニューアルされ、本学サッカーの新たな出発に大きな後押しとなった。

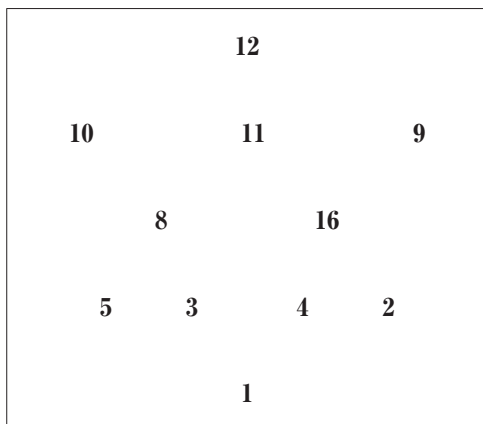
1. メンバーの選出と選考理由

P-No	背番号	氏名	学年	身長	体重	理 由
①	1	H.N.	2	180	70	第1GK 正確なキック コーチング能力
	21	N.E.	4	175	75	ポジショニングと正確なキャッチング
	31	R.S.	1	173	60	敏捷性では、No.1
②	2	Y.K.	3	168	65	攻撃力があり、サイド攻撃に厚みを付けるが守備力は平均点
	15	K.S.	2	174	64	1対1に強く、攻守に貢献、スタミナもある

③・④	3	S.H.	2	180	73	剛のタイプのCB 高さがあり, 対人に強さを発揮する
	4	S.K.	2	173	63	クレバーなCB ディフェンスリーダー
	19	K.K.	2	179	71	剛のタイプのCB
	20	Y.O.	1	173	62	身体能力が高く攻撃力もある 正確なパスで組み立てもできる
	22	A.K.	4	178	69	CBだけでなくSBもでき, 守備のユーティリティープレイヤー
⑤	5	R.K.	2	170	66	粘り強い守備と気の利いた攻撃参加
	23	H.M.	2	167	61	スピードはないが守備力があり, サイドMFもこなす
⑥・⑧	8	K.T.	3	175	62	攻撃のキーマン 長短のパスでゲームメイク シュート力あり
	6	T.U.	1	181	73	守備力のあるボランチ
	24	R.Y.	2	170	63	スピードで崩すタイプ FWとしても通用する ⑩としてもOK
	16	S.S.	2	179	69	守備的なMF カバーリング能力が高い
	25	R.M.	1	170	68	豊富な運動量で攻守にわたって中盤をカバー
	7	Y.S.	1	173	62	正確なキックで攻撃を組み立てる 正確なFK
⑦	17	K.T.	4	170	55	運動量豊富な守備型のMF
	18	R.S.	2	174	64	スピードで勝負するタイプのウイング
	9	R.S.	4	172	66	1対1に強く攻守に貢献するウイング
⑪	26	S.O.	1	170	63	縦への突破とシュート力が魅力 ヘディングも強い
	10	Y.T.	2	163	60	スピードとテクニックで攻撃を組み立てる典型的なウイング
⑩	27	K.F.	1	173	67	スピードはないが1対1に強くサイドを突破するウイング
	11	Y.N.	3	170	60	攻撃に変化を与え味方攻撃陣を生かすプレーに長けている
⑨	28	T.A.	4	175	70	シュート力はチーム No.1
	12	A.U.	1	176	64	テクニックがあり攻撃の核でありシュートも正確
	13	K.S.	2	179	70	チーム No.1 のスピードFW
	14	K.S.	3	175	71	豊富な運動量で相手DFを翻弄する シュート力あり

◎選考に当たっては、コーチ、学生スタッフ（主将・副主将、学年リーダー）の意見を参考にした。プレシーズンの日々のトレーニングや試合合宿でのパフォーマンスの結果を踏まえて決定した。1年間の長いシーズンの中で、選手の入替えも行った。選手間の競争意識の向上を図った。

2. 基本メンバー



3. チームコンセプト（判断力の速さ、攻守の切り替えの速さ、相手に負けない運動）

1) 攻撃

- イ) 「8」のミドル・ロングパスで相手DFの裏をとる攻撃
 - ロ) 「9」と「10」のスピードを生かしたサイド攻撃⇒アタッキングゾーンのサイドを空けておく
 - ハ) 「11」のゲームメイク ⇒ スルーパスからシュート
- ニ) FK CKのリプレーを生かす

2) 守備

- イ) ディフェンス・ラインを高く保つ（ラインコントロールを細かく行う⇒基本はゾーンディフェンス）
- ロ) コンパクトな守備陣形（相手にスペースを与えない⇒プレッシャーをかけ易く、ボール奪取力を上げる）
- ハ) 「16」と「3」・「4」のCBを中心として守備組織を構築する

4. 戦績

1) アミノバイタルカップ関東予選

2回戦 対 東京工業大学 1-1 (PK2-3) 敗北

- ①圧倒的に攻めながらも、ちぐはぐな攻撃で得点に至らなかった。
また、相手GKの必死のセーブでことごとくシュートを防がれた。
終了間際、なんとか追いつきPK戦に持ち込んだが、相手GKの活躍で2回戦敗退に終わった。
- ②リーグ戦に向けて
 - イ) 守備力の強化

ロ) フィニッシュの精度を上げることと、シンプルなパスワーク

2) 2部リーグ戦 優勝 15勝3敗 勝ち点45 (得点:57 失点:20 得失点:37)

	第1節	第2節	第3節	第4節	第5節	第6節	第7節	第8節	第9節	勝ち点	得失点
対戦校	日大生資	首都大	創価大	一橋大	成城大	武蔵大	帝京大	玉川大	東京大		
前期	●1-2	○3-1	○3-1	○7-1	○5-2	○3-2	○4-2	○6-1	●0-1	21	19
後期	○1-0	○5-0	○3-0	○3-0	○2-0	●1-3	○5-2	○1-0	○4-2	24	18

①前期:初戦の日大生資戦は、ディフェンス陣の連携がうまくいかず先制をゆるし、また、攻撃陣も攻めがちぐはぐで、アミノバイタルカップの反省が生かせなかった。

2戦目以降は、失点はあったが圧倒的な攻撃力で大量得点。首位で終了した。

②後期:第6節の敗因は、主力選手のケガによる離脱と雨天でグラウンドコンディション不良により本来の攻撃サッカーができなかったことであった。

徐々に整って安定した守備と圧倒的な攻撃力で優勝を果たし、目標とした1年での1部復帰を果たすことができた。

◎明確なチームコンセプトを示すことの重要性、選手の自主的な日々の活動が1部復帰の大きな要因となった。「やらされる・こなすトレーニング」から、「自ら考えて行うトレーニング」への変化を感じた。

【2016年度(2年目)の挑戦】

1. メンバーの選出と選考理由

P-No	背番号	氏名	学年	身長	体重	理由
①	1	H.S.	3	180	70	第1GK 正確なキック コーチング能力
	21	R.S.	2	173	60	敏捷性では、No.1
②	2	Y.K.	4	168	65	攻撃力があり、サイド攻撃に厚みを付けるが守備力は平均点
	13	K.S.	3	174	64	1対1に強く、攻守に貢献、スタミナもある
③・④	3	S.K.	3	173	63	クレバーなCB ディフェンスリーダー
	4	Y.O.	2	173	62	身体能力が高く攻撃力もある 正確なパスで組み立てもできる
	14	T.H.	3	175	71	スピードはないが対人(1対1)に強い
	15	Y.K.	1	180	70	身体能力が高い 対人に強さを発揮

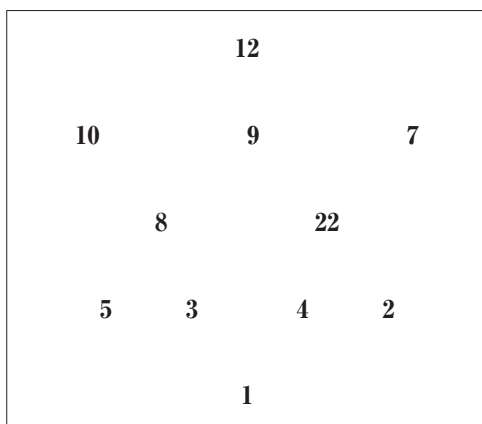
サッカー 勝利のための戦術とチーム編成

⑤	5	R.K.	3	170	66	粘り強い守備と気の利いた攻撃参加
	17	N.S.	2	164	61	左利きでサイドからのクロスが正確
⑥・⑧	8	K.T.	4	175	62	攻撃のキーマン 長短のパスでゲームメイク シュート力あり
	6	R.M.	4	173	64	運動量豊富な汗かきプレーヤー
	16	S.S.	3	179	69	守備的なMF カバーリング能力が高い
	22	R.M.	2	170	68	豊富な運動量で攻守にわたって中盤をカバー
	18	Y.S.	2	173	62	正確なキックで攻撃を組み立てる 正確なFK
	23	M.K.	2	168	67	サポートプレーで組み立てに貢献
⑦	7	S.O.	2	170	63	縦への突破とシュート力が魅力 ヘディングも強い
	28	K.F.	2	173	67	スピードはないが1対1に強くサイドを突破するウイング
	19	S.O.	1	168	61	スピードに乗った突破 シュート力
⑪	10	Y.T.	3	163	60	スピードとテクニックで攻撃を組み立てる典型的なウイング
	20	N.S.	2	167	60	運動量とテクニック 切り込んでのシュート
⑩	9	Y.N.	4	170	60	攻撃に変化を与え味方攻撃陣を生かすプレーに長けている
	24	R.Y.	2	170	63	スピードで崩すタイプ FWとしても通用する ⑩としてもOK
⑨	11	K.S.	4	175	71	豊富な運動量で相手DFを翻弄する シュート力あり
	25	K.S.	3	179	70	チームNo.1のスピードFW
	12	A.U.	2	176	64	テクニックがあり攻撃の核でありシュートも正確
	26	N.T.	2	169	64	状況判断が良く味方を生かすプレー
	27	Y.A.	2	178	78	ツボにはまったシュート力はチームNo.1 高い身体能力

◎前年度と同様に、選考に当たってはコーチ、学生スタッフ（主将・副主将、学年リーダー）の意見を参考にした。また、前年リーグ戦優勝の立役者が多く残ったので、彼らを中心としたメンバー構成を考えた。その理由は、能力の見極めができていたからである。

一方、日々のトレーニングによって能力を向上させた選手を積極的に抜擢することによって、選手間の競争意識の向上を図った。1年間の長いシーズンの中で、選手の入れ替えは重要なポイントであった。

2. 基本メンバー



3. チームコンセプト（前年度と同様）

1) 攻撃

- イ) 前年の攻撃の核「12」, 「8」, 「9」, 「10」が残ったので、サイド攻撃だけに頼らない攻撃を組み立てる。
- ロ) 右ウイングの「7」は、サイド突破よりシューターとしての起用
- ハ) パフォーマンスの向上した「10」のサイド攻撃を生かす
- ニ) CB「4」の正確なロングパスを生かす攻撃陣のポジショニング（動き出しのタイミング）がポイント
- ホ) ボランチのバランスを考える
- ヘ) カウンター攻撃とビルドアップ攻撃の見極め、トランジションのスピードを要求

2) 守備（前年度と同様）

- イ) 1部の強豪校に通用する、個の強さを強化
- ロ) ボランチ「22」と「3」・「4」のCBで中央の守備ブロックを構築する
- ハ) 両サイドバックは、対人で負けない強さを要求

4. 戦績

1) アミノバイタルカップ

2回戦	対 武蔵野大学	10-2	勝利
3回戦	対 國學院大學	1-1 (PK 戦 9-8)	勝利
4回戦	対 亜細亜大学	1-0	勝利
準決勝	対 大東文化大学	1-1 (PK 戦 4-5)	敗北
3位決定戦	対 東京大学	1-0	3位

サッカー 勝利のための戦術とチーム編成

◎3回戦以降の対戦相手は、1部所属の強豪校であり、リーグ戦の前哨戦の趣であった。ロースコアの接戦が続いたが、前年2部リーグを席卷した「堅守を基盤とした攻撃サッカー」が強豪校にも通用するとの手ごたえを感じた。

2) 1部リーグ戦 優勝 12勝2分4敗 勝ち点38 (得点:36 失点:23 得失点:13)

	第1節	第2節	第3節	第4節	第5節	第6節	第7節	第8節	第9節	勝ち点	得失点
対戦校	山梨学院	大東文化	日本大	立正大	立教大	帝京大	東京大	亜細亜大	國學院大		
前期	○1-0	○2-1	●1-2	●0-7	○1-0	○6-0	○3-0	○3-1	●0-3	18	3
後期	○1-0	△1-1	○3-1	●2-4	△0-0	○3-2	○3-0	○3-0	○3-1	20	10

イ) 前期：日本大学、立正大学の強豪校には力負けし、國學院大學戦も落としたが、持ち前の攻撃力で6勝を挙げ、前期を2位で折り返すことができた。

「8」・「9」のゲームメイク、左サイド「10」の突破からチャンスをつくり、「12」・「7」が決める攻撃パターンで17得点を挙げた。ただ、守備の乱れから14失点、再構築の必要性を感じた。

ロ) 後期：夏の強化合宿・強化試合を通じて、守備の再構築と更なる攻撃力強化を図ったことと、「前期負けたチームには、絶対に負けない」を合言葉とし、後期に臨んだ。

第3節の対日大戦が1つの契機となった。1点先制されたが選手交代がはまり、逆転勝ち。

立正大学には負けたが、改善された守備組織の頑張り、攻撃サッカーがマッチし、強豪校がつぶしあいをしている状態の中、順調に勝ち点を重ね、2位立正大学に勝ち点3の差で優勝を勝ち得た。

特に、左ウイング「10」は、アシスト王の活躍もあり、リーグ最優秀選手に選ばれた。

東京都第1代表として、関東大学サッカー大会の出場権を得た。

3) 関東大学サッカー大会

イ) 予選リーグ Bブロック

	城西大	立教大	産業能率大	東京経済大	勝ち点	順位
城西大学		2 ● 4	2 ○ 1	1 ● 6	3	4
立教大学	4 ○ 2		1 ● 3	1 △ 1	4	3
産業能率大学	1 ● 2	3 ○ 1		2 △ 2	4	2
東京経済大学	6 ○ 1	1 △ 1	2 △ 2		5	1

第1戦 対 産業能率大学（神奈川県第1代表） 2：2 引き分け

強豪校に2度のリードを許したが、慌てず粘り強い戦いで、引き分けに持ち込んだ。

第2戦 対 立教大学（東京都第4代表） 1：1 引き分け

この試合も1点リードを奪われたが、粘り強い守備で追加点を許さず終盤得点、引き分け。

第3戦 対 城西大学（埼玉第1代表） 6：1 勝利

4校すべてが、昇格決定戦に出場の可能性を持つ状態で最終戦を迎えた。

この試合、東経サッカーの本領が発揮された。堅固な守備で相手攻撃を防ぐと「8・9」が組み立て、「10」の突破から得点を重ねた。

結果、Bブロック1位で昇格戦に進出。Aブロック2位の立正大学との対戦が決定。

ロ) 関東リーグ昇格決定戦 対 立正大学 2-3 *関東リーグ昇格ならず

リーグ戦では、唯一2連敗を喫した相手、是非とも勝利し関東に昇格することを念じて対戦。雨天のなか、前半は拮抗した展開であったが、警戒していた相手1トップに起点をつくられ、先制点を奪われた。

後半立ち上がりに追加点を奪われ、0-2となったところで、守備的ボランチの「22」に変え攻撃的なMF「18」を投入、反撃を試みた。

「10」のドリブル突破に対し、相手DFが反則、PKを得て1-2。

追加点を奪われ1-3となったが、交代した「18」の思い切ったロングシュートが決まり、2-3とした。その後、攻勢を続けたが終了の笛。

関東昇格の夢は絶たれた。立正大学に3連敗!!!

◎創部以来の念願であった「関東2部昇格」は、あと一步で果たせなかったが充実したシーズンであった。

前年度の結果を踏まえてか、将来有望な新入部員が加入し、今後の選手層の充実が図れると考える。

【2017年度（3年目）の挑戦】

1. メンバーの選出と選考理由

P-No	背番号	氏名	学年	身長	体重	理 由
①	1	H.S.	4	180	70	第1GK 正確なキック コーチング能力
	21	D.M.	1	173	60	GKとしての資質はチームNo.1.
	31	R.S.	3	173	60	敏捷性では、No.1
②	2	K.S.	4	174	64	1対1に強く、攻守に貢献、スタミナもある
	25	H.S.	1	170	67	対人に強く攻守に貢献するSB左サイドも可能
③・④	3	S.K.	4	173	63	クレバーなCB ディフェンスリーダー
	4	Y.O.	3	173	62	身体能力が高く攻撃力もある 正確なパスで組み立てもできる
	14	Y.K.	2	180	70	高さがあり対人に強い
	15	R.K.	1	181	71	スピードがありサイドバックもこなす
⑤	5	R.K.	2	170	66	粘り強い守備と気の利いた攻撃参加
	17	K.T.	1	174	63	クレバーなディフェンダー ボランチもこなす
⑥・⑧	16	S.S.	4	179	69	守備的なMF カバーリング能力が高い
	6	R.M.	3	170	68	豊富な運動量で攻守にわたって中盤をカバー
	8	Y.S.	3	173	62	正確なキックで攻撃を組み立てる 正確なFK
	18	M.K.	3	168	67	サポートプレーで組み立てに貢献
	19	K.T.	1	176	68	ボール奪取力があり攻撃にも貢献
⑦	7	S.O.	3	170	63	縦への突破とシュート力が魅力 ヘディングも強い
	20	K.F.	3	173	67	スピードはないが1対1に強くサイドを突破するウイング
	22	A.Y.	3	165	53	スピードでサイドを突破 正確なクロス
⑪	10	Y.T.	4	163	60	スピードとテクニックで攻撃を組み立てる典型的なウイング
	23	N.S.	3	167	60	運動量とテクニック 切り込んでのシュート
⑩	24	R.Y.	2	170	63	スピードで崩すタイプ FWとしても通用する
⑨	9	K.S.	4	179	70	チームNo.1のスピードFW
	12	A.K.	3	176	64	テクニックがあり攻撃の核でありシュートも正確
	11	K.K.	2	170	60	スピードと運動量で相手をかく乱 ⑩としても起用できる
	13	N.T.	3	169	64	状況判断が良く味方を生かすプレー

◎前年度と同様に、選考に当たっては、学生スタッフ（主将・副主将、学年リーダー）参考にした。

前年リーグ戦優勝の立役者のうち、攻撃を組み立てる2人のゲーム・リーダーが抜けたのは打撃であったが、彼らに劣らぬ成長を見せた2人「11・8」に期待した。

守備陣は、右サイドバックに能力の高い新人「25」を起用した。

日々のトレーニングによって能力を向上させた選手を積極的に抜擢することによって、選手間の競争意識を凶ったのは、前年通り。1年間の長いシーズンの中で、選手の入れ替えは頻繁に行った。

2. 基本メンバー

		12		
10		11		7
	8		6	
5	3	4	25	
		1		

3. チームコンセプト（前年度と同様であったが、より高いレベルで実践できるよう向上させた）

1) 攻撃

- イ) 「12」のキープ力と「10」の突破力を生かす
- ロ) 「8」の正確なキックを生かす⇒FK, CKからの攻撃, ロングパスで相手DFの裏を狙う
- ハ) 2列目・3列目の積極的な攻撃参加
- ニ) 「11」の運動量で相手守備をかく乱
- ホ) 「5・10」のコンビネーションで左サイドから崩す

2) 守備

- イ) 攻撃から守備への対応のスピードを要求（トランジション）
- ロ) 危機管理⇒攻めている時こそ考える：前がかりになりすぎないこと
- ハ) ラインコントロール

4. 戦績

1) アミノバイタルカップ

2回戦 対 日本大学文理学部 9-2 勝利

3回戦 対 学習院大学 1-3 敗北

*初戦の大勝に浮かれたわけではないが、攻守にわたってチームコンセプトを貫徹せず、完敗であった。

リーグ戦に向けて、選手個々がフォア・ザ・チームのために自分の役割を考えたトレーニングに対する意識改革の必要性和チームコンセプトを再認識することとした。

2) 1部リーグ戦 4位 10勝3分5敗 勝ち点33 (得点:37 失点:21 得失点:16)

	第1節	第2節	第3節	第4節	第5節	第6節	第7節	第8節	第9節	勝ち点	得失点
対戦校	一橋大	明治学院大	帝京大学	國學院大	成蹊大	武蔵大	立教大	大東文化大	山梨学院大		
前期	○1-0	○2-1	○3-1	○3-1	○1-0	○5-1	○4-0	●1-3	△1-1	22	13
後期	○3-0	●1-2	○3-2	○3-1	●0-1	●1-2	△2-2	●1-2	△2-2	11	2

イ) 前期

アミノバイタルカップの反省から、チームの再構築を行い新ゲーム・リーダー「8」の活躍、新人DF「25」の起用によってチーム力が向上し、破竹の7連勝で首位を堅持した。

「8」は、正確かつ強烈なキックで攻撃をけん引し、チームの得点王とアシスト王となった。

ロ) 後期

夏の強化合宿・練習を順調に終え、後期をスタートし第13節（後期第4節）までは、明治学院大との首位争いが続いたが、台風の影響による試合の延期、その影響による平日開催などのアクシデントが重なり、前期は勝利した成蹊大学戦・武蔵大学戦と連敗、最終戦（対 山梨学院大学）を迎えた。

山梨学院大学戦は、2点を先行し優位に進めたが、終盤追いつかれ引き分けに終わった。

最終戦を引き分けに終わったことで4位を確保。関東大学サッカー大会の出場権を獲得した。前年度は、下位からの挑戦であったためのびのびと東経サッカーを展開し優勝を勝ち取った。

後期になると多くのチームに研究されたためか、アクシデントのためかチームコンディションを崩し、最終的に4位で終了することとなった。

1年間の長いシーズンを通してチームコンディションを維持することの難しさを痛感した。

この経験を今後のチーム作りに生かすことが課題となった。

3) 関東大学サッカー大会

イ) 予選リーグ Aブロック 4位 (グループリーグ敗退)

	東京経済大学	明治学院大学	作新学院大学	国際武道大学	勝ち点	順位
東京経済大学		1 ○ 0	1 ● 2	0 ● 2	3	4
明治学院大学	0 ● 1		3 (4 △ 3) 3	3 ○ 1	5	2
作新学院大学	2 ○ 1	3 (3 ▲ 4) 3		1 ● 3	4	3
国際武道大学	2 ○ 1	1 ● 3	3 ○ 1		6	1

対 明治学院大学戦：台風の影響のある最悪のコンディションの中、右サイドバック「2」のCKからの虎の子の1点を守り抜き勝利

対 作新学院大学戦：ディフェンス陣の乱れを突かれ、カウンターから失点を重ね、交代出場の「19」が1点を返すも惜敗

対 国際武道大学戦：相手ウイングに右サイドを突破され、2失点。攻撃も実らず敗退。

◎グループリーグ1勝2敗で昇格決定戦に出場できず、大会を終了。

4) 東京都サッカートーナメント学生系の部 予備予選

- 1回戦 対 拓殖大学 1-1 (PK 3-1) 勝利
- 2回戦 対 東京農業大学 2-2 (PK 4-3) 勝利
- 3回戦 対 立正大学 1-3 敗北

イ) 1回戦・2回戦とも対戦相手は、関東2部リーグ所属の強豪チームであったが、4年生の抜けた新チームの選手が活躍。2戦とも粘り強い試合運びで先行されるも追いつき、PK戦を勝ち抜いた。

ロ) 新戦力は、チームコンセプトをよく理解し、すんなり旧チームのメンバーに勝るとも劣らない活躍をした。

ハ) 対立正大学戦を前に、DF陣に故障者が続出。1週間でDF陣を再構築することができず、失点を重ねた。

ニ) 上位カテゴリー（関東リーグ所属校）との対戦の結果、東経サッカーは関東リーグでも十分通用するとの手ごたえを感じた大会であった。

◎戦績に満足を感じることはできなかったが、目指す「東経大サッカー」のモデル（方向性）を示すことはできた。本年も将来「東経大サッカー」を担う有望な新戦力（1年生）が加わったことは、期待感にあふれる。

【終わりに】

当初の目標であった「1年で1部復帰」は果たせたが、「3年後の関東リーグ昇格」は果たすことができなかった。

しかし、この3年間の成果は、1つの目標を目指して選手諸君が継続した努力のたまものであったと言える。

また、2014年の村山キャンパスのリニューアルと近年の本学サッカーの戦績によって、優れた選手を送ってくれた高校の指導者の支援によって達成された結果だと考える。

指導者にとっては、いつまでも研究と研鑽を積み選手を納得させ指導しなければならないことを実感した3年間であった。

特に、感じたことは、練習中のパフォーマンスを見極め、選手起用を考えることと、試合の流れを注視し「選手交代の判断」をすることの難しさであった。「ツボにはまった起用・交代」より、見誤った試合の方が多かったように思う。

近年の本学の選手は3年しか活動しない（近年の就職状況を反映し3年でサッカー活動を終わる）選手が増大している。本学の場合、J-リーグ（プロ選手）を目指す選手がほとんどいないため、3年で引退する選手が多くを占める。

このことは、指導上の隘路であるが、この3年間は中心選手の移行がスムーズに行うことができ戦績を残せたと考えている。2年生・3年生中心のチーム作りができ、次を担う1年生が成長できる環境が整えられた。

今後も、このサイクルを続けることができれば、常に高いレベルのチーム力を維持できるとの手ごたえを感じた。

関東リーグ所属や都県リーグ所属でも大学&OBが強化を支援している大学の場合、J-リーグを目指す選手が多く在籍し、高いレベルでの競い合いが行われている。

このような大学と伍して戦うには、次のような点が重要と考える。

- ①指導者と選手の信頼度の高さ（選手目線で言うと：公正・公平な選手選び）
- ②指導者の弛まぬ研鑽
- ③規律を明確にし、遵守すること（戦術だけでなく、目標とするチームコンセプト提示）
- ④チームメンバーの相互理解と協調（プレーの特徴だけでなく、人間性も含む）
- ⑤高校時代に競技実績を残した選手の獲得

最後に、2015年度の国内研究員として1年間サッカー就けの毎日を送れる環境をいただき、指導実践を遂行できたことに感謝し、この稿を終了する。

参考文献

1. 都並敏史 2013 「サッカー戦術フォーメーション事典」実業之日本社
2. 杉山茂樹 2014 「布陣図鑑」廣済堂出版
3. 山本昌邦 他 2010 「世界基準 サッカーの戦術と技術」新星出版社
4. 神川明彦 2012 「サッカーの戦術&トレーニング」新星出版社
5. 林 雅人 2011 「サッカー ゴールを奪う攻撃戦術」ナツメ社
6. 杉山茂樹 2008 「4-2-3-1 サッカーを戦術から理解する」光文社新書
7. 洋泉社 MOOK ワールドサッカー 「戦術」最前線 2010
8. サッカークリニック 「ポジションの適性を見極める」2009 5
9. サッカークリニック 「システムを考える」2003 12
10. 平成28年 第49回 東京都大学サッカーリーグ戦プログラム
11. 平成29年 第50回 東京都大学サッカーリーグ戦プログラム
12. 平成30年 第51回 東京都大学サッカーリーグ戦プログラム
13. 飛翔 第41号 東京経済大学体育会
14. 飛翔 第42号 東京経済大学体育会
15. 飛翔 第43号 東京経済大学体育会
16. 鈴木良平 2014 「ブンデスリーガの戦術 フォーメーション BOOK」日東書院